

# news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



高井貞二 『感情の遊離』 1932年 油彩、キャンバス  
「生誕100年 高井貞二展」より

# 生誕100年 高井貞二展

## —「昭和」を描いた人—

高井貞二は、いまから100年前、1911(明治44)年に生まれ、和歌山県高野口町で育った画家で、本名を貞治といいます。当館では、1979(昭和54)年以来、30余年ぶりの回顧展でした。

高井は、1930(昭和5)年、19歳のときに第17回二科展へ出品した飛行機や機械、ビルディングなど近代的な事物への素朴な憧れを反映させた作品《文明》が入選し、「メカニズム」の画家として画壇に登場しました。東郷青児や中川紀元など、当時二科展でモダンな作品を発表していた画家たちの注目を受け、仲間に恵まれて「新油絵の会」や「九室会」創立にも参加します。

そして同時に、当時青年達に人気があり、高井も愛読者だった雑誌『新青年』の挿絵画家として仕事をはじめました。初仕事は、ロボットが登場する海野十三「人造人間殺害事件」[『新青年』12-5、1931(昭和6)年1月]でした。

二科展に絵を出品し、『新青年』に挿絵を描くのは、文学青年でもあった高井が中学生の頃から思い描いていた夢でした。高井が描いた挿絵は、生活のためという当面の目的を越えて描く楽しみに満ちています。『新青年』のほかにも探偵小説雑誌『ぶろふいる』、『モダン日本』などに寄稿するようになった高井は、本文の内容

によって巧みに画風を替えるようになりました。なかでも印刷面の均質な感じを活かしたペン画を得意とし、細いペンの線による緻密な描写や、定規を使った簡潔

な線とインクで塗りつぶした面を対比させた描き方は、洗練された雰囲気を誌面にもたらしています。

高井は中学生の頃から印刷物に強い関心を持っており、均質な印刷の効果を思わせるペン画に、活字のように整えた文字を配して画文集を作っています。多くの雑誌や書籍が出版されるようになった大正期に育った高井にとって、本や雑誌の装幀や挿絵は、最も親しみのある絵画表現であり、油彩画の制作にも画文集や挿絵の制作で鍛えたセンスが持ち込まれています。高井の油彩画は、はじめは風景や静物を写実的に描いたものでしたが、しだいに想像力によってモチーフを生み出し、画面を整理し、構成するスタイルを獲得していました。

それは、古賀春江や東郷青児の作品が注目を集める当時の二科展の求めるモダンな気分には合っていました。また、メカニズムのモチーフである飛行場や飛行機、機械のイメージは、民間航空会社の草分けとなった日本航空輸送研究所を経営していた井上長一が伯父だった高井にとって身近な存在でした。高井は、井上



《煙》1933(昭和8)年 油彩、キャンバス

長一が1922(大正11)年に堺市大浜に開いた日本航空輸送研究所をたびたび訪ね、旧制中学校を卒業してからはここで働いていました。

高井のメカニズムは、当時の自動車や草創期の航空会社がはらんでいた熱気が機械の美への目を開かせ、少年の想像力を刺激して生み出させた機械文明のファンタジーだったと言えるでしょう。そして、それを表現するためにふさわしいのは、「油絵らしい」筆跡を活かした写実表現ではなく、油絵の具独特の濃厚な質感を保ちながら、機械によって無数に生産される印刷物を連想させる平面的な描写が見られる「ポスターの感じ」とも評された画風でした[福沢一郎「二科の前衛室」『みづゑ』332、1932(昭和7)年10月]。機械そのものと、機械が作る表現である印刷物の両方に対する親しみから生まれた高井独自の個性的な表現として、魅力のある画風です。

しかし、メカニズムに対する注目は長く続きませんでした。メカニズムそのものが同時代の消費文化と結びついたスタイルだったため、流行が過ぎるのも早



《文明》と高井貞二 1930(昭和5)年



小栗虫太郎「紅毛傾城」挿絵『新青年』16-12 1935(昭和10)年10月



日本航空輸送研究所全景



『支那の市場』《エミグラン트の街》と高井



『支那の市場』 1939(昭和14)年 油彩、キャンバス



『エミグラン트の街』 1940(昭和15)年 油彩、キャンバス

かったのではないかでしょうか。もうひとつには1931(昭和6)年の満州事変以降、美術にもしだいに社会的な役割を果たすことが求められるようになったことも大きかったようです。

制作に行き詰まり、しだいにメカニズムの頃の明朗な気分を失っていた高井に転機をもたらしたのは、意外にも1938(昭和13)年に武漢攻略戦の従軍画家として中国を旅行したことでした。戦地であっても、中国大陆は日本国内の抑圧された雰囲気と比べると、開放感に満ちていたといいます。この旅の成果として第27回二科展に出品した《支那の市場》[1939(昭和14)年]は、高井の制作の新しい展開を示しています。

《支那の市場》に描かれた賑やかな市場の情景は、絵で読む物語のようです。高井は、この作品でアメリカのグラフ誌『LIFE』で見た1930年代のアメリカ壁画運動を報じる図版を参考に、異国風なモチーフを集めて画面全体を覆い尽くす構成を試みました。すべてが戦争を続けるための活動に振り向かれるべきとされた当時、制作を続けるため、絵画が公のものとして共有されるありかたをアメリカの壁画運動に求め、大衆の関心が高い戦地である中国にモチーフを選んだと考えられます。

しかし、そこには現実の市場にはない模型のようなヨーロッパ風の街並みや、ページの文字まで細かく描かれた本を画

面の手前に置くことなど、高井の好んだ抒情的な幻想の要素も織り込まれ、盛りだくさんな絵を読む楽しみが隠されています。童画風な表現で、描き方も、筆で塗るだけではなく、柔らかな絵の具の層を引っ掻いた細い線による表現などの試みが見られ、楽しんで制作をしている様子がうかがえます。

中国旅行中に描いたスケッチと高井自身の文をもとに作られた『中支風土記』[大東出版社、1939(昭和14)年7月20日]にも、新鮮な気分で制作に向かう様子がうかがえます。戦闘がおわったあとに街に入っていることもあって、戦地の緊張感より目に触れる珍しい風物に生き生きとした感動を得て、写生する楽しみを満喫しているようです。戦跡より上海、蘇州、南京、九江の風景や、人々の姿が数多く描かれ、高井の関心のありかを知ることができます。

この旅の開放感が忘がたかった高井は、翌々年の1940(昭和15)年に個人旅行者としてふたたび中国へ渡り、奉天やハルビン(いまの長春)を旅行して《エミグラントの街》を描きました[1941(昭和16)年 第28回二科展出品、会友推举]。前景には大きくハルビンの地図を入れ、取材した情景をコラージュするように構成した画面は、色彩も温かく明るくなっています。《支那の市場》と《エミグラントの街》を並べて撮った写真を見ると、連作としてアジアの人々を描いていくこうという構

想があったのかもしれません。

作風を変える一方で、高井は「メカニズム」の頃に好んでいた画面全体を細々と描きこみ、複雑に組み立てる傾向を再び強めています。《支那の市場》に先だって、従軍画家としてはじめて描いた戦争画で、第1回聖戦美術展に出品した《進撃》[1939(昭和14)年]が高井自身に自分はいわゆる戦争画には向いていないと実感させた出来だったことも、ただ社会の要請に応えるだけでなく、高井自身が持ち合わせている感受性に立ち返ろうとする試みに向かわせたのではないでしょうか。

もちろん、高井が苦手だと感じた戦闘場面ではなくても、日本軍が侵略していった中国を描き、中国で日本人とさまざまな民族がともに生きるという当時の国の宣伝に添っているという点では《支那の市場》や《エミグラントの街》も「戦争画」です。しかし、これらの作品からは、戦争画としての機能だけでなく、異国的な風土や人々の姿に魅力を感じ、共感をもって描くことによって、戦時下に画家として生きる道を探っていた生身の姿を感じることができます。

それは、こののち、戦況がより厳しくなった時期に描かれた一連の作品に、より強く感じられるかもしれません。1943(昭和18)年1月、高井は第一次関東軍報道演習に参加し、旧ソ連との国境地帯を旅しました。新聞記者、作家、カメラマンなど、演習に加わった人たちとともに



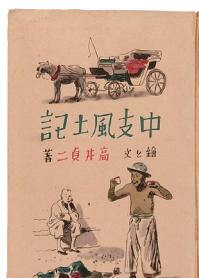
『モダン日本』5-2 裏表紙広告  
1934(昭和9)年3月



『ぶろふるいる』 5-1 表紙  
1937(昭和12)年1月



『中支風土記』挿絵原画より



『中支風土記』  
1939(昭和14)年



左：「献納大壁画展」のため《ハワイ真珠湾爆撃の海賊》を描く高井 1942(昭和17)年



『北の国境』1943(昭和18)年 油彩、キャンバス



『国境の少年達』1943(昭和18)年 油彩、キャンバス 個人蔵

アムール河に近い孫吳の駐屯地と青年開拓義勇隊訓練所、その近郊にあった勝武開拓団などを巡り、それぞれの活動を取材することが目的で、高井にとっては3度目の中国旅行になりました。

その体験を記した著書『北を護る兵士たち』[愛の事業社、1943(昭和18)年12月15日]では、『中支風土記』と同じく、高井自身が文章と挿絵を手掛けました。戦況が厳しくなったことを反映して、機密保持のために正確な地名や日時が伏せられおり、高井の見聞や思いも全ては記されていないでしょう。しかし、その制限のなかで、書けることと描けることに集中した結果、厳しい風土のなかで生きる多くの人と会い、強く心を動かされた様子に重点を置いていることが印象的です。

このときの取材による油彩画、『北の国境』[第30回二科展、1943(昭和18)年]『国境の少年達』[第6回文展会場出品、岡田賞受賞、1943(昭和18)年、個人蔵]にも共通した傾向があります。国境警備に

あたる兵士たちを描いた『北の国境』も、開拓団の訓練生たちを描いた『国境の少年達』も、北の大地を背景に澄んだ光のなかに立つ人物を写実的な描き方で描かれています。知り合った人々に対して高井が抱いた感情が、それぞれの人物の描写に温かみを与え、おだやかで誠実な人格を感じさせます。

当時、中堅の画家として認められていた高井は、陸軍美術協会の一員として「航空美術展」「陸軍美術展」「海洋美術展」をはじめとする展覧会での発表の機会が与えられ、『靖國の絵巻』など多数の出版物へ挿絵の寄稿を求められていましたが、現場に居合わせたわけでもなく、十分な資料もなしに描く戦闘の場面などは「あたり前のことですが、面白い仕事ではなかったですね」[高井貞二「聞き書きわが前半生の遺物」『名作挿絵全集第7卷昭和戦前・戦争小説篇』平凡社、1980(昭和65)年]とのちに述べています。そのような時、対象に温かな感情を抱いて描けた『北を護る兵士達』の挿絵や、『北

の国境』『国境の少年達』などの作品は、描く喜びが残された仕事だったと言えるのではないでしょうか。

このうち、1944(昭和19)年9月に召集を受け、徳島の部隊に入営するまで、高井は「軍需生産美術推進隊」に参加し、軍需産業として重要な工場や炭坑を訪れ、働く人たちの慰問のため、現地制作をする活動をはじめます。北海道の赤平炭坑で、3名で一週間に250号の大作を1点、30号、25号など34点もの作品を制作し、好意的に受け入れられました。これも自分の仕事を喜んでくれる人の顔が見える、当時求めうる最大の描く喜びを追求した結果だったと思われます。この時のメンバーが中心となって戦後「行動美術協会」を結成し、目標に農村や工場での活動をあげたのも、この時の活動を通して得たものがあったからでしょう。

19歳から画家として活躍した高井は、戦前、戦中を東京、戦後をニューヨークですごし、それぞれの時代と街の文化から刺激を受けながら、自己の芸術を形成しました。時代の表現を追求し続けた作風の変遷は多彩で、一人の人間の仕事とは思えないほどですが、それは、戦争をはさんで激しく揺れ動いた昭和の世相の反映でもあるからです。

そのなかで、高井は戦前の東京で「メカニズム」に抒情的な物語性を、戦後のニューヨークで抽象表現主義に情感をこめて独自の明快な表現に至ったように、制作が行き詰まり、転機を求めるときには、いつも自身の感情を支えにしています。時代の求めに器用に応えていった多才な人が、変転を乗り越えてきた過程に、知的な計画ではなく、もっとも素朴な感情の力が働いていたことは意外な感じもします。しかし、高井は絵画の「イズム」も、社会の方向も変転することを、若いときから、同時代を生きた人たちと同じように経験してきた人です。そのなかで掴んだゆるぎのないものが、自身の感情を信じ、制限の中で最大限に制作に生かすことだったのではないかと思います。

「戦争にまつわる作品はわが前半生の遺物、それも、今となってはあまり愉快な遺物ではありませんねえ…。」[高井貞



『北を護る兵士達』挿絵原画より



『北を護る兵士達』1943(昭和18)年



「軍需生産美術推進隊」北海道赤平炭坑にて  
1944(昭和19)年

二「聞き書き わが前半生の遺物」同上]と高井はのちに述べていますが、高井は当時の作品を処分していませんでした。戦後、美術作品とは、作家の創造性が純粋に実現されたものであるべきだという考えが当然なニューヨークで抽象画家として活躍した高井にとっても、外からの圧力が大きく働いた「遺物」のなかに画家として認められる作品があったことを示しています。

高井が作品にこめた感情は、いまも私たちにも訴えかける力を持っています。そして、高井が共感できる対象を描こうとしたことを手がかりに、作品が背負っている時代の政治的な部分を越えて作品と向き合おうとする経験が、昭和モダンの香りを伝えるメカニズムの作品や、戦後のニューヨークの刺激的な雰囲気を感じ

じさせる抽象絵画を見るときにも、新しい視点をもたらしてくれるようです。

毎週日曜日に開いた解説会「フロアレクチャー」のときに、参加された方から「一生分の仕事のうちには、見ているのが辛くなるような時期もあって、楽しいばかりではないけれど、好きな作品だけを見ているときとは違った手応えを感じる」「はじめてこの作家を知った気がする」と度々お聞きしました。100年前に生まれた人の「遺物」を含めた仕事の全体を把握しなおすことで、美術作品はつねにさまざまな外からの圧力と制限のなかで創造される社会的な存在であることを実感すると、同じく社会的な存在である自分の近くにある、現実的なものとして感じられるようになったからではないでしょうか。

(植野比佐見)



《故郷の風景》1956(昭和31)年 油彩、キャンバス



《鳥と魚》1965(昭和40)年 油彩、キャンバス

## 高井貞二 略年譜

1911(明治44)	2月5日大阪市生まれ。神戸市、高野口町で育つ	終戦まで過ごす
1929(昭和4)	伊都中学校を卒業。伯父・井上長一の「日本航空輸送研究所」に勤務のかたわら信濃橋洋画研究所に通い、小出権重、黒田重太郎、国枝金三、鍋井克之の指導を受ける	終戦、この年、向井潤吉、田中忠雄、古屋新、樋倉省吾、田辺三重松、伊谷賢三、柏原覚太郎、小出卓二と9名で行動美術協会を設立する
1930(昭和5)	上京、第17回二科展に『文明』が初入選し、「メカニズム」の画家として注目された。東郷青児のデザイン事務所「新造型工房」に参加、中川紀元の紹介で雑誌『新青年』に挿絵を持ち込む	行動美術協会を退会
1933(昭和8)	二科展の新進作家たちと「新油絵の会」を結成、第1回展に『煙』などを出品、シュルレアリスムへの関心を深める	1951(昭和26) ニューヨークで初めての個展を開く
1937(昭和12)	『新青年』誌をはじめとする挿絵の仕事を通して知り合った作家たちと「集団 新挿絵」を結成、第1回展に川端康成「抒情歌」による『抒情歌』3点を出品、うち一点を川端康成が購入する	1958(昭和33) ポインデクスター・ギャラリーと契約を結ぶ。この頃から、アメリカ各地の展覧会への出品を求められるようになる
1938(昭和13)	「九室会」創立に参加。従軍画家として上海、蘇州、南京などをめぐる	1959(昭和34) 絵本「Henry and The Red Glove」が刊行される
1939(昭和14)	第26回二科展に『支那の市場』を出品、アメリカの壁画運動に刺激を受け、大画面による具象的な群像表現を模索する。絵と文を手がけた「中支風土記」が刊行される	ホイットニー・アニュアルに出品
1940(昭和15)	ハルビン、長春などを旅行。第27回二科展『エミグランツの街』『帰る人々』を出品、特待賞受賞。紀元二千六百年奉祝美術展第二部に『市場』を出品	1961(昭和36) 第27回コーコラン・アメリカ現代絵画ビエンナーレ、カーネギー国際美術展に出品
1941(昭和16)	第28回二科展『ハルビンの庭』『松花江の船出』を出品、会友に推挙	1963(昭和38) 宮本三郎、佐野繁次郎、田村孝之助らのすすめで第17回二紀会に出品、委員となり、『作品-1』『作品-2』で第3回福島賞を受賞。この年から日本で開かれる現代美術展にも出品し、個展を開くようになる
1942(昭和17)	第一次関東軍報道演習に参加し、ソ連との国境近くを巡る。第30回二科展に『北の国境』、第6回文展に『国境の少年達』を出品、岡田賞を受賞する。「北を護る兵士達」が刊行される	1964(昭和39) 現代美術の動向展(京都国立近代美術館)出品作『作品-1』が東京国立近代美術館に収蔵される
1944(昭和19)	軍需生産美術推進隊の創立に参加し、北海道の炭坑などで現地制作を行う。9月応召、徳島の部隊に入営し、	1970(昭和45) サウスカロライナ州ウィントップ女子大学客員教授となる
		1973(昭和48) アメリカの日本作家展(京都国立近代美術館、翌年東京国立近代美術館)に出品
		1979(昭和54) 和歌山県立近代美術館で回顧展「高井貞二展」開催。絵とエッセイによる回想録「あの日あの頃」が刊行される
		1980(昭和55) 徳島県郷土文化会館で回顧展「高井貞二展」が開催される
		1986(昭和61) 6月26日逝去、享年75歳。第40回記念二紀展で『愛』『花火』『嵐し・晴れ・夜』が遺作展示される。昭和61年度和歌山県文化賞を受賞

# 「生誕120年 保田龍門展」拾遺

保田龍門は大正から昭和にかけて活躍した美術家である。本名を重右衛門というが、出生の地にそびえる龍門山にちなみ、龍門と号した。1891(明治24)年生まれで、2011(平成23)年には生誕120年を迎えた。当館では郷土作家としての彼を紹介するためにこれまで、和歌山県立美術館時代の1964(昭和39)年に「保田龍門展」を、現在の建物であらたに活動をはじめるときの開館記念展として1994(平成6)年に「大正のまなざし—若き保田龍門とその時代—」を開催してきた。また、コレクション展でも常に数点の作品を紹介している作家である。これまでにご遺族から作品資料を数次に渡ってご寄贈いただいており、今回の展覧会ではそれらを中心に紹介した。東京美術学校時代のデッサンには秀逸なものが多くあり、同時期の裸体モデルを描いた油彩画や戦中の神話を題材にした幅5.5メートルもある油彩画《光明皇后賜療》はこの作家の力量を推し量るに充分なものである。彫刻では、戦前の院出品作から、最後の作品とされる《南方熊楠像》の石膏原型まで代表的なものを紹介した。また、親交のあった西村伊作が制作し龍門に贈った壺や、写真家であり、よき理解者でもあった島村逢紅が撮った龍門のポートレートのほか、戦争中の金属供出のために今は存在しない多くの公共的彫刻の写真資料などもあわせて展示した。

ここでは今回の展覧会では紹介できなかった作品をとりあげたい。それは



保田龍門の画帖より 1919(大正8)年

折り本の画帖で、なかには全部で10点の水彩画が描かれている。最初の絵には「一九一九、二、一〇、三保旅館にて」とあり、その次は「二、一一、三保」とあり、その次がこの図版のものである。右上に右から「二、一二於龍華寺」と読める。三保や龍華寺というのは静岡の名勝地で、龍華寺は山号を「觀富士」といい、境内の蘇鉄が有名である。この絵で左上に描かれているのは富士山であり、右半分を占めているのがまさしくその蘇鉄だろう。この画帖は、現場で描いた「生」の感じが強く残るもので、一瞥して作品としての個性や印象を留めるのが難しい類のものだろう。また、当館には彼の自伝的な自筆の年譜があるが、それにはこの旅行についてなにも記されていない。

しかしながら私がこの画帖に目をむけたのは、龍門と同年生まれの宇野浩二(1891-1961)という小説家が美術家との交流について書き残した文章の中に、龍

門の名を見つけたからである。

「さて、やはり、私が三保に滞在していた時分に、保田龍門がおなじ羽衣亭にとまっていたことがあった」と始まる一節で宇野は、龍門が文学を専門とする自分が驚くほどの読書家であることを述べ、会うといつもアメリカ文学の話ばかりしていたという。また龍門が「たのまれて、富士山の絵をかいてますが、富士山は実に難しいです」と語ったとある。

宇野のこの文章では「大正五六頃」となっているが、水上勉の評伝によれば宇野が三保に滞在したのは、この画帖の年記と違わず大正7年末から翌年3月ぐらいまでのことであった。つまり、これらの絵は龍門が宇野と邂逅した時期に描いたものということになる。興味のある方は宇野浩二の『回想の美術』(東出版、昭和51年。ただし初出は『新美術』昭和18年6月号)をご覧いただければと思うが、東京美術学校を卒業した大正6年に文展(文部省美術展覧会)で特選をとり、この三保滞在の翌年にはアメリカ、ヨーロッパへの4年にわたる留学につくことになる将来有望な青年画家であった龍門に、富士を描かせたのはいったい誰で、またその絵はいまどこにあるのか、拡がり始めるあらたな興味の一端をここに載せて、彼の生誕から120年を隔てて、私自身も次のステップに進みたいと考えている。

(寺口淳治)



生誕120年記念 保田龍門展(2011.9.17-12.4)会場風景

# 佐藤時啓さんによるワークショップから

## 「もっと、光を」ドキドキ少年撮影隊ミュージアム編 PARTII



佐藤時啓さん



報告展示の様子



中辺路でのワークショップ



撮影する子どもたち



カメラを通すと風景が逆さまに写って見える

夏休み中の8月20日と21日、NPO法人 和歌山芸術文化支援協会(wacss)の主催によるワークショップ『「もっと、光を」ドキドキ少年撮影隊ミュージアム編 PARTII』を開催しました。指導をお願いしたのは、東京芸術大学教授で作家として活躍されている佐藤時啓さんです。

佐藤さんは昨年、中辺路に滞在してカメラになっているツリーハウスを制作。また美術館では、デジタルカメラで作品を撮影し、プリントされた写真を再構成するというワークショップを行いました。今年、佐藤さんが提案されたのは、カメラを作って美術館を撮影しよう、という内容でした。

写真を撮ることは、今、とても身近でありふれた行為です。携帯電話ではとても気軽に写真が撮れますから、「内蔵されているカメラで写真を撮影している」などと意識しない人も多いのではないでしょうか。そんな、デジカメやケータイの写真しか知

らない人に取って、カメラが自分で作れるものとは思えないでしょう。

また、写真といえばフィルムを扱うものだったのも過去のことになりつつあります。フィルムの出し入れの時に光を入れてしまって失敗した経験のあるような人間(筆者です)にとっても、カメラを作るワークショップなんて難しいのでは?という疑問が先に立ちました。

今回作ったのは、厚紙とトレーシングペーパー、そして虫眼鏡一つという簡単な材料から作る「虫眼鏡カメラ」です。そして映像の定着には感度の低い感光紙を用いることで、多少の光が漏れても映像がつぶれてしまうこともなく、撮影ができました。

カメラそのものの原理を知り、見える像を定着するという写真の基本が体験できて、自分の作品が作れるという内容になったのです。

2日間にわたって当館と中辺路で開催

されたワークショップには、小学生から高校の教員まで60人近くの参加者があり、撮影された写真は100点以上になりました。これらの内容は、美術館のギャラリーで9月17日(土)から10月2日(日)にかけて、報告という形で展示しました。

この展示を見た和歌山大学教育学部附属中学校の先生方が、美術と理科の共同授業としてカメラの制作と撮影の授業を実施されました。理科では「身近な物理現象」として光や音について学ぶことになっており、それにも適した内容だったようです。

デジカメでもフィルムカメラでも、映像を作る仕組みは変わらないのですが、その基本を体験しながら、それが物理の知識にも、美術の表現にも広がることを授業でも実践していただけたことは、佐藤さんをはじめワークショップにかかわった者にとってもうれしいことでした。(奥村泰彦)

## 吉原英雄展 画家のドラマ

11月19日(土)～2012年1月15日(日)

銅版と石版という異なる技法を一つの作品に用いた代表作を中心に、吉原英雄(1931-2007)の足跡を振り返ります。

吉原英雄《シーソー 1》1968年



## コレクション展 2011/12-冬

### 特集 生誕130年 日高昌克

12月20日(火)～2012年2月19日(日)

2011年に生誕130年を迎えた本県御坊市出身の画家、日高昌克(1881-1961)の特集展示を行います。



日高昌克《澤邊の朝》1936年 風景、絹 個人蔵

### 特集 吉原英雄を囲む作家たち

12月20日(火)～2012年2月19日(日)

「吉原英雄展 画家のドラマ」の開催にあわせ、吉原英雄と交流のあった作家たちの特集展示を行います。



木村秀樹《pencil 2-3》1974年 シルクスクリーン、紙

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）休館／月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

## 友の会版画プレゼント

平成23年度友の会版画プレゼントは、昨年に引き続き、吉原英里さんの作品です。今回の作品のテーマは「ガーデン」。友の会会員の方に、ミュージアムショップにてお渡ししています。4作品からお好きな1点をお選びください。(先着順)



《The garden 洋梨》  
2011(平成23)年  
エッティング・ラミネート・手彩、紙



《The garden 無花果》  
2011(平成23)年  
エッティング・ラミネート・手彩、紙



《The garden 柿》  
2011(平成23)年  
エッティング・ラミネート・手彩、紙



《The garden 向日葵》  
2011(平成23)年  
エッティング・ラミネート、紙

## メールマガジンのご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイマーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。



### 友の会会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧(同伴者1名まで)
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアーやミュージアムコンサートなど)
6. 版画の颁布会への参加

### 入会のご案内

一般会員 6,000円  
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690

担当：松原

